

File-1

i.D.S株式会社(名神口)
代表取締役 宍戸 義勝さん

「かばんの製造、販売を通して、若い人の雇用を生み出し、地元・豊中を活気づけたい」(宍戸さん)



『TOYONAKA MADE』のかばんを世界へ

現代の職人集団をめざして

国内外の有名ブランドや百貨店のOEM(委託製造)のほか、自社ブランドも手がけるi.D.S株式会社。若い人があこがれる職業をめざして、手づくりの技術がもたらしたかばんづくりに取り組んでいます。そのきっかけは、代表取締役の宍戸義勝さんが、メーカー勤務時代に知ったかばんづくりの実態。「職人の多くは60歳代後半から70歳代。すぐれた技術をもっている人も雇って後継者を育てる余裕のない人がほとんど。このままでは日本のかばん縫製技術が失われてしまうと思ったんです」(宍戸さん)。

そこで、未経験でも短期間で技術を身につける方法を考えました。かばんづくりの全工程を細分化して、ひとつの作業に集中して取り組むことで各工程のコツをつかむ。そうすることで最初から全工程を学びよりも効率的に技術を習得できます。早ければ2年程度で全工程を担当できるようになります。また、熟練した職人を招いて匠の技を間近で見たり、皮革の特質を研究者から学ぶ機会をつくるなど、さらに技術と知識を深め、もっと上をめざす環境も整えています。



20~30歳代の職人が、若い感性、情熱と確かな技術力で仕事に向かっています

モノづくりへの誇り

自社ブランドでは、最高の品質をめざした「POSSIBLE LITERIES」や丈夫な国産帆布のみで仕上げた「pasito」など、いずれも品質や素材、機能性に徹底してこだわります。かばんの持ち手ひとつにも1週間の工程をかけて持ちやすさと耐久性を追求。さらに「品質保証書」をつけて職人の名前を明記。これにより職人には製品に対する責任感と誇りが生まれます。

そして、かばんには『TOYONAKA』の文字。「自社ブランドのかばんを世界へ広めたい。それが若い職人にとって自信となります」(宍戸さん)。「TOYONAKA MADE」のかばんを世界で見かける日もそう遠くはないかもしれません。



品質保証書は誠実なモノづくりの証



カジュアル用途のブランド「Dialog」には「MADE IN TOYONAKA」の文字

File-2

株式会社ヤマネ(庄内西町)
代表取締役専務 谷 紀幸さん

よそがやっていないモノを作る

「誰が見ても楽しめるジオラマづくりがうちの特徴」(谷さん)



模型業界のトップランナー

博物館の展示模型、社寺仏閣の復元模型から建築、機械装置など、産業模型分野のパイオニアで、国内トップレベルの技術を誇る株式会社ヤマネ。社員数19人と小粒ながら、社員一人ひとりの確かな技術力が生み出す精緻な模型づくりは、大手メーカーも一目置く存在です。近年はオリジナルの商品開発にチャレンジして、新たな領域を開拓。その背景には、社員の発想重視でアイデアを形にしていけるチーム力があります。

誰もがチャレンジできる企業風土

毎月1回、社員全員でお弁当を食べながら和気あいあいと自由に話し合う「研究会」。おしゃべりのなかから浮かんできたアイデアなども拾い上げ、一つひとつのアイデアをどうすれば実現できるか、みんなで考えます。そのなかから生まれたヒット商品が「ラッピング車両模型」。アニメキャラクターとコラボレーションして鉄道会社が展開するラッピング車両を模型の分野で商品化しました。模型愛好者の間ですでに噂が広まり、大人気に。「小さな模型にプリントする技術や版權問題など未経験のことも一から勉強してクリアしていきます」と代表取締役専務の谷紀幸さん。少しでも可能性があるならチャレンジしよう。失敗は次に生



鉄道&アニメ好き社員の発案で生まれた商品は全国の愛好者から問合せが絶えません



電車だけではなく、バスの走りも再現したジオラマ

かそつ、と挑戦を続け、新たなノウハウの蓄積にもつながっています。やりたいことをどうすれば形にできるのかを常に考え、「何もなし」のところから考えて形になっていくことがおもしろい」と谷さんは話します。

大型ジオラマの中で自動車が一日中自動運転するシステムを考案したのは業界初。レールから常時給電できる電車と違い、バッテリーで走る自動車の自動充電システムを開発しました。センサーにより、人が渡る横断歩道の手前ではちゃんと停止します。次の目標は「ジオラマで飛行機を飛ばすこと」と世界初の夢に向かって研究が始まっています。